

本研究会では、小林先生が実践された美術の「自由進度学習」と、その中での「ICT の活用」について、参加者がそれぞれの視点から意見を述べ、深掘りした意見が交わされました。特にクラウド上の資料の利用状況、生徒の学習の様子、最終制作物の形態に関する議論が中心となりました。

1. クラウド上の資料の活用について

・ 資料の種類と目的:

- 小林先生は、Google ドライブ上に多様な資料を用意していました。これには、基本的な材料の仕入れ先や簡単な説明、アイデアを広げるための事例、YouTube 動画へのリンク、各段階の参考作品、授業 PDF (1 時間目の説明資料など)、題材のルールや見通し、使用する道具、各工程 (1 番から 5 番) で考えられること、制作手順、デザイン的な知識 (構成配置、アクリル絵の具の知識、早見表など) が含まれます。
- これらの資料は、生徒が自由にアクセスできるよう準備されており、必要に応じて利用することを目的としています。

・ 生徒の利用状況と有効性への懸念:

- ある先生の観察では、特定の生徒が小林先生が用意した Google ドライブ上の資料を本時では見ていないケースを述べました。しかし、その生徒はインターネット検索等をフル活用し、タブレットで効果的に使いながら創作を進めていました。
- 別の生徒は、玉ねぎの構図を考える際に、クラウド上の手順 (スライド) を見て次のステップを確認するなど、資料を有効活用していました。
- 小林先生の懸念としては、普段の授業で生徒が資料を使っている様子に見えるものの、「どの資料がどれくらい有効で、どれが不要なのか」という点について、具体的なデータや蓄積が不足していると感じている点が挙げられました。

・ 資料の蓄積と提供方法に関する評価:

- 大島先生からは、資料が單元ごとにフォルダで蓄積されており、生徒が「学んだことがノートのようにずっとそこに蓄積されている」状態である点が非常に高く評価されました。これは、過去の学習内容を振り返り、必要な知識や技法を呼び出すための「参考資料」として機能していると思われました。

- 資料は一度に全て提供されるのではなく、その都度説明が加えられたり、単元ごとに蓄積されていく形式が取られており、これが美術の授業として学習が成立する上で良い方法であると述べられました。また、一度使った資料は、身につけている生徒にとっては見なくても良く、忘れてしまった生徒が見返すという使い方ができる点も評価されました。

2. 自由進度学習とICTの活用に関する観察と評価

・ 生徒の学習姿勢の具体例:

- **トマトをデザインする女子生徒**: Googleドライブ上の資料は見ませんでしたが、タブレットでインターネットの画像をフル活用し、「GoodNote」に下書きのイメージと検索画像を貼り付けながら、より具体的で美味しそうに見えるデザインを熱心に考えていました。彼女にとってタブレットの活用は非常に効果的でした。
- **トウモロコシの女子生徒**: Googleドライブもインターネットもあまり使わず、50分間ひたすら自分の下書きをより良くすることに集中し、時折インターネットで実物の画像を確認する程度でした。
- **玉ねぎの生徒**: 玉ねぎの様々な角度を調べ描いた後、どう配置すべきか分からなくなり、クラウドの手順資料を参照していました。しかし、その後の「どのような美味しさを伝えたいか」という当初のテーマを忘れてしまい、アイデアのきっかけが見つけられない様子も観察されました。

・ 自由進度学習の理念と効果:

- 今日の授業は、中学校の美術における「自由進度学習」の「一つの理想」であると絶賛されました。
- 生徒が「自分が表現したいと願う題材」を見つけ出し、それに向かって時間の使い方を工夫しながら個の進度に応じて制作に臨む点が素晴らしいと評価されました。
- 毎時間ごとに友達との進度が異なるといった「差」が生じず、生徒たちが安心して自分の思いを元に活動を構成できている点が、中学校の美術指導において「見習うべきもの」と述べられました。
- 生徒が「自己決定できる」要素(順番、ツール、個人/グループでの作業方法)が多く、一人ひとりに合った学習のあり方である点が指摘されました。
- 自由進度学習の成功は、「目的が子供たちにしっかり伝わっていること」にあると強調されました。最終的なゴール(完成品)が明確に設定されており、そこに到達するまでの手順を生徒自身が自由に選択できるという構造が、自己調整的な学びにつながるとされました。これは、単に「どこにたどり着いても良い」という自由では

なく、「ゴールはここだ、登り方はどこでもいいぞ」という自由であるべきだと説明されました。

- **小林先生の指導の質：**

- 小林先生の「個別指導(机間指導)」が非常に優れていると評価されました。生徒一人ひとりに肯定的な声かけをするだけでなく、**具体的に良い部分を見つけて焦点的に褒めたり、制作に行き詰った生徒に対し、その具体の改善点をさりげなく示唆したりする声かけが素晴らしい**と評価されました。
- 生徒が迷っているときに「これはこうかい？」と確認し、生徒が自分の思いや課題を明確化できるよう促したり、具体的な提案(例：トウモロコシの真ん中を鮮やかにする、トマト作品を構成している生徒に「トマトの実以外(花、葉等)」の要素を使ってみる等)を行ったりすることで、生徒の思考を更に深め、創作活動に大きな影響を与えていた様子が伝えられました。これは小学校の先生方にも是非見習ってほしい机間指導だと強調されました。

- **ICT 活用への肯定的な見方：**

- 「**思いを明確にするため**」、あるいは「**表現をさらに具体的で良いものにするため**」の ICT 活用は非常に効果的であり、「美術科授業に於ける ICT 利用の一つの手本」とであると述べられました。
- 過去には美術の授業で ICT 使用が敬遠され、手で描くことの重要性が強調されていましたが、今は時代が変わり、子供たちの発想を豊かにし、具体化するために ICT が有効活用できると認識されています。
- 生成 AI にデザインや作品制作のすべてを丸投げするような使い方ではなく、自分の主題に近づけるために ICT を使う生徒の姿は大変素晴らしく、本時はお手本のような授業だったと評価されました。
- ICT を担当している地域おこし協力隊の方も、予想以上に ICT が有効活用されていることに驚き、その良さを肯定的に評価しました。

- **自由進度学習における課題(制作工程の表示、モチーフ選定)：**

- 制作工程を数字(①主題の決定、②見通しの設定等)で管理している点について、順序性を強く意識させてしまうため、A、B、C のような選択肢を示す方が**良いのではないか**という疑問が呈されました。
- 最初の「面白い形を探す」という活動において、ピーマンなどの実物を使わず、タブレットでインターネット画像を探す形になっている点が「**もったいない**」と指摘されました。インターネット画像に絞られることで子供たちの創造性が制限される可能性

があるため、実物を与え、クローズアップしたり、カットしてみたりするような探索活動を促す方が、題材の面白さを引き出せると提案されました。

3. 最終的な制作物の形態(アクリル絵の具かデジタルか)に関する議論

- 現在の運用と背景:

- 現在の授業では、最後の課題として「スケッチブックのアクリル絵の具で、実際に紙に描く」ことが固定されており、物理的な作品として提出されます。
- 生徒からは今のところ大きな葛藤は見られないものの、デジタルでの制作を望む生徒もいる可能性は示唆されました。デジタルでの作業は便利さがあり、配置などの検討に使う生徒もいるとのことでした。
- 小林先生の意図としては、中学1年生から継続してアクリル絵の具を使った題材に取り組ませることで、翌年度の自画像制作などにも繋がる「集大成」として位置づけている点が挙げられました。また、高品位な印刷物の準備が難しいという現実的な理由や、自身の「絵の具でやろうという先入観」があることも認めました。

- 将来的な可能性と評価上の課題:

- デジタルで完成品とすることも教育的には成立するという可能性が議論されました。特に、平面構成の課題であれば、ICT(グラフィック)だけで完了させることも比較的容易であると述べられました。
- しかし、中学校の指導要領では「不透明水彩」(アクリル絵の具など)を生徒が自分の手で使えるようになることが必須項目とされており、これは外せない指導内容であると指摘されました。
- 異なる形態の作品(アクリルとデジタル)をどう評価するかという課題も提起されました。デジタルの方が早く終わる可能性があるため、作品を2つ制作して評価する、あるいは色彩と構成に評価点を絞り、アクリル絵の具での制作を「おまけ」とする、またはデジタル編集も同列に考え、その指導も充実させる、といった選択肢が示唆されました。

4. 全体的な感想と今後の展望

- 今回の授業は、全体として「とても素晴らしい授業」であり、「モデルのような授業」であると高く評価されました。
- 生徒たちが美術にのめり込み、自己表現できる時間が確保されていることが、彼らが美術を好きになる要因であると考えられました。

- 生徒たちがオンラインのクラウド資料を活用したり、制作レポートを自作したりするなど、大人を凌駕する ICT スキルを示している点に改めて驚きと感動が表明されました。これは美術だけでなく、他の教科での ICT 活用が彼らの成長を支えていることの証でもあります。
- 今回の議論を通じて、教師側も多くの学びと今後の課題(例:実物モチーフの活用、デジタル作品の評価方法、制作工程表示の工夫など)を得ることができたと述べられ、今後のさらなる教育実践の改善に繋げていきたいという意欲が示されました。